

かくもわれはまた思亂れんには、いかにして、わが心の歸趣を定めて、流れのあなたに掉し、眞の岸にゆかんはいかにかせん、

あゝわれはしらし、あゝわれはしらし、あゝ暗き谷間向ひの山の頂にゆかばいかに、

怕しき猛き獸の吼ゆる音、谷間にひびきて、われを襲はんか、われはかくて、いかにすべき、雲に似たるわが、わずらい、拂へどもきたりて、避けえじ、……………

若き人は花片を抱いて、泣きふしぬ、

お年玉

(前號の續)  
金田みず子

菊子は何時にも無い清々とした美しい眼貌で、雪ちやんの爲に拵て置いた、件の針箱を兩手に持つて、

出て來ました。

此を雪ちやんの側に置ながら、「此は私のお年玉ですよ、もつと良物なら好んですけれどもねー」  
「アラマー、好針箱ですことー、お婆さん、本當に私にくださるの？」

「誰も外の人に遣るんじやーないんですよ、雪ちやんに上るつて拵いて置いたんですものー、」  
雪ちやんの眼の中に輝いて居た涙の粒は、此時消へ去つて、兩方の頬に鬻か二つ現れました。

雪ちやんは、此針箱の抽斗を上からだんく下へ開けて、見て行きました。此度は抽斗を皆引抜してしまつて、中に入つて居る品を一つ一つ炬燵の蒲團の上へ並べながら、

「此はお婆さんのお衣裳の切ですか、奇麗ですことー、」

「其は私が若い盛な時分に拵いた衣裳の切ですもの。其を拵いた時分は、旦那が盛で飛ぶ鳥も落とす云ふ様な威勢で、お金は澤山あつたし、これと云ふ不自由な事は無かつたのでしたがねー、どしてマーこんなにな貧乏したんだろー」と、心丈夫の菊子にも似合ぬ愚痴らしい事を言ひ出したのを雪ちやんは遮つて、

「お婆さん、妙なねー、此んな所に切か貼つてありますね、一寸ご覧なさい、此處を………」と、一番下の抽斗の底に貼つてある切を菊子に見せました。そこで菊子は、其は妙だといわん許りに、頸を傾け眉毛の間に皺を集て、其の中を覗こまうとしますと、

「アラお婆さん、一寸お待ちなさいな、何か書てありますわ、」と、雪ちやんが叫んだので、

菊子の胸には、奇怪な感がしたのか、急に動悸が打ち始めました。

「二階に懸つて居る額の後を見よ」と、雪ちやんが讀み始めた時には、菊子の心臓は烈しく其の循環を始めました。其は旦那の書置だといふ事に氣が付たからでしよー。

二階に懸つて居る額の後に、全体何んな不思議なものがあるのかしらー、とれ一つ行つて見よー、と菊子の胸の血は益々騒ぎました。

頓菊子は二階へ上つて行き、元、旦那が書劑にして置いた室へ入りました。此は此の家での上等な室なので、先南向の床の間には、支那の賢人、李白と云ふ人が飄を提げて、何千丈となく高い瀑布を見上て居る、大きな掛軸が懸つて居り、又た其の前には黒塗の机が一つ、桐の樹の本箱が五つ程並

んで居りました。然し其は皆空でありました。其の外柵や戸柵も亦虚でありました——其は旦那の書物や器械で一抔であつたのですけれども、旦那の遺言で、〇〇女學校の圖書館へ寄附してしまつたからであります。

其から此部屋の中で最も際立つて目に付くものは、東の壁に懸つて居る、三尺許のお釋迦様の額と、其の向ひの壁に懸つて居る、やはり前と同じ位の基督の肖像でありました。

菊子はお釋迦様の額を取下さうとして手を伸ばしましたが届きません、そこで雪ちやんに頼んで踏臺を持って來て貰ひまして、漸く其の上に昇つて額に手が届く事になりました。今や額は菊子の手に依つて捧られよとする機會、餘重かつたのか、此の大きな額は手から外れて、下へバターと墜ち、

其が爲、額の後の板は割れました。

三

「アラお婆さん、板がこんなに割れましたわ！」と云ひながら雪ちやんは、此板をソーツと持上ますと、下には大きな白い厚い紙が、額一杯になつてありました、雪ちやんは又ソーツと此紙を持上ますと、驚くべし!! 此處に、紙幣が貼つてある様に、澤山並べてありました。

此を見た菊子は、驚いて暫時言もなく、悄然イザんで居りました。此の時菊子の目には、數滴の涙が正に落ちんとして居りました。其は良人がこんな大枚なお金を自分の爲に遺して置いて呉れた親切が、深く情にしみたからでしよ。菊子はその場に座り、額に兩手を合せて俯きました。其は冥土に御座る良人に、誠心誠意からの感謝したのであり

ましたる。

「お婆さん、お婆さん、あの向の額の後には何にも無いんですか、何か未だあるんじやーありませんか。私が見ますよ、好いんですか、」と雪ちやんが踏臺を運ぶ物音に、菊子はつと氣がつき、

「アー、そーだつたねー、忘れて居ましたの、雪ちやん、見てくださいな、」と言を云ひ終らぬ中に、雪ちやんはクリストの額の後を覗込み、

「アラお婆さん、妙な物が下つて居ますよ、小さな瓶の様なものが、額の後に……」と云ひながら、瓶の吊してある紐を解きました、それから其を下さうとしますと、小さな割合に重たかつたので、雪ちやんの片手にはとてもさへへられないで、下へトーンと落ちました。而して蓋は取れて、中からコロコロと四方へ金貨が轉り出しました。

お金が出たのは此が始めてでは無いから左様驚はしなかつたが、金貨が出たのには、菊子は夢かと許驚きました。

菊子が斯様に大盡になつたので、雪ちやんは心密に思ひますには、「モーお婆さんはとても私見た様なものを相手にしては被下るまい、此のお婆さんに棄てられ、ばモー私を可愛がつて呉る人は一人も居ない、せめて母さん一人でも居たら……、ア、又家のお叔母さんにお飯の焼方が悪いのお汁の鹽がからいのと小言を云はれ、雑巾のかけ方が下手だと云つては叱られるのか、どーして私はこんなにいじめられるのだろー」と身の成行を考へ出して、急に胸が一杯になつて、涙も出ず、恨しそーにジーツと菊子の顔を凝視て居りました。

流石菊子は年老て居るだけに、チャンと雪ちやん

の情の中を見抜きまして、

『何を雪ちやんは考へて居らつしやるの？何も悲しい事なんぞは有やしませんよ。あの階下へ行つて、花ちやんから戴いた、赤い巾着を持つてゐらっしゃいな、』と云はれて雪ちやんは下へ行、頓其を持って上て來まして此を菊子に渡ますと、菊子は中へ金貨を一杯つめて、之を雪ちやんの前に差出し、

『サー此が私の本當のお年玉ですよ、どれ程私はお錢を入れて上げたいと、先頃から思つて居つたのか知れなかつたのですけれども、お錢が無かつたものだから……。サー上ますよ。此は良い巾着だから、お婆さんが大切にしてお置きなさい、用に立つ事もあるからと、云つて置たが、本當に用に立つ事になりました。好かつたねー、サー上ますよ、手を出して……。』と菊子にゆわれまし

たが、雪ちやんは手も出さないし、又貰はうとする様子もなく、

『私戴きませんわ、其お金はお婆さんのお旦那さんが、お婆さんに上るつて仕舞つてお置なすつたのですもー、私が戴いては悪いでしよー』と言ひ張るので、菊子も大いに持餘し、

『だつて、私が上るのだから好いでしよー、お旦那さんが上るのじやーない、お旦那さんから戴いたのを、私が雪ちやんに上るのですもの、そんなら好でしよー？』

『だつて、私そんなお金なんか持て居ると、何處から持つて來た、盗すんででも來たんだろー、なんて家の叔母さんに言はれますもの……。』

『その時は、松田のお婆さんに戴いたのですと、そーお云ひなさいな。それでもいかなければ、私

が一所に行つて、譯を話して上たら良、でしよ？、サー取つてお置きなさいな、と薦められて、雪ちやんは止を得ず受取ましたが、實は貰つて好、ものか、悪いものか、判談がつかまぜんから、唯お禮も何にも云はず、手に巾着を握つた許りで、悄然と立つて居りました。

「アノ私は雪ちやんにお頼が有るのですが、聽いてはくださるまいか」

「エー、お婆さんの頼なら、私、何んでも成ますわ、何んでも……」と雪ちやんは言に力を入れて云ひ放ちましたが、其は確に情の底から沸き出して、口から溢出た所のものでありましょー。

「雪ちやんは私の娘になつては被下るまいか、と以外の要求に、暫時雪ちやんは呆然して居りました。見る／＼雪ちやんの頬は朝日に輝く赤い薔薇

の様に成りまして、可愛らしい唇から次の様な言が響き出しました。

「お婆さんの娘になれるなら、私何も入用ませんわ、此んな嬉しい事は有りません……」。

松田秀雄の家は元來小じんまりとして奇麗でありました上に、此頃壁も新しくなり、畳替は出来、唐紙障子の紙は皆新しくなつて、此家許へお正月が来た様でありました。

太織縞の羽織に、燃る様な赤い袴を穿き、赤いシヨールを懸けて手に書物包と辨當箱を持つた可愛らしい一人の娘の子が、午後三時十分頃、菊子の家へ入つて行きまして、坐敷に上るや、書物を持つたま、お母様、只今……と右の手を付て、頭を下げましたのを私は見ました。此の娘の子は誰でありましょー？、(おはり)